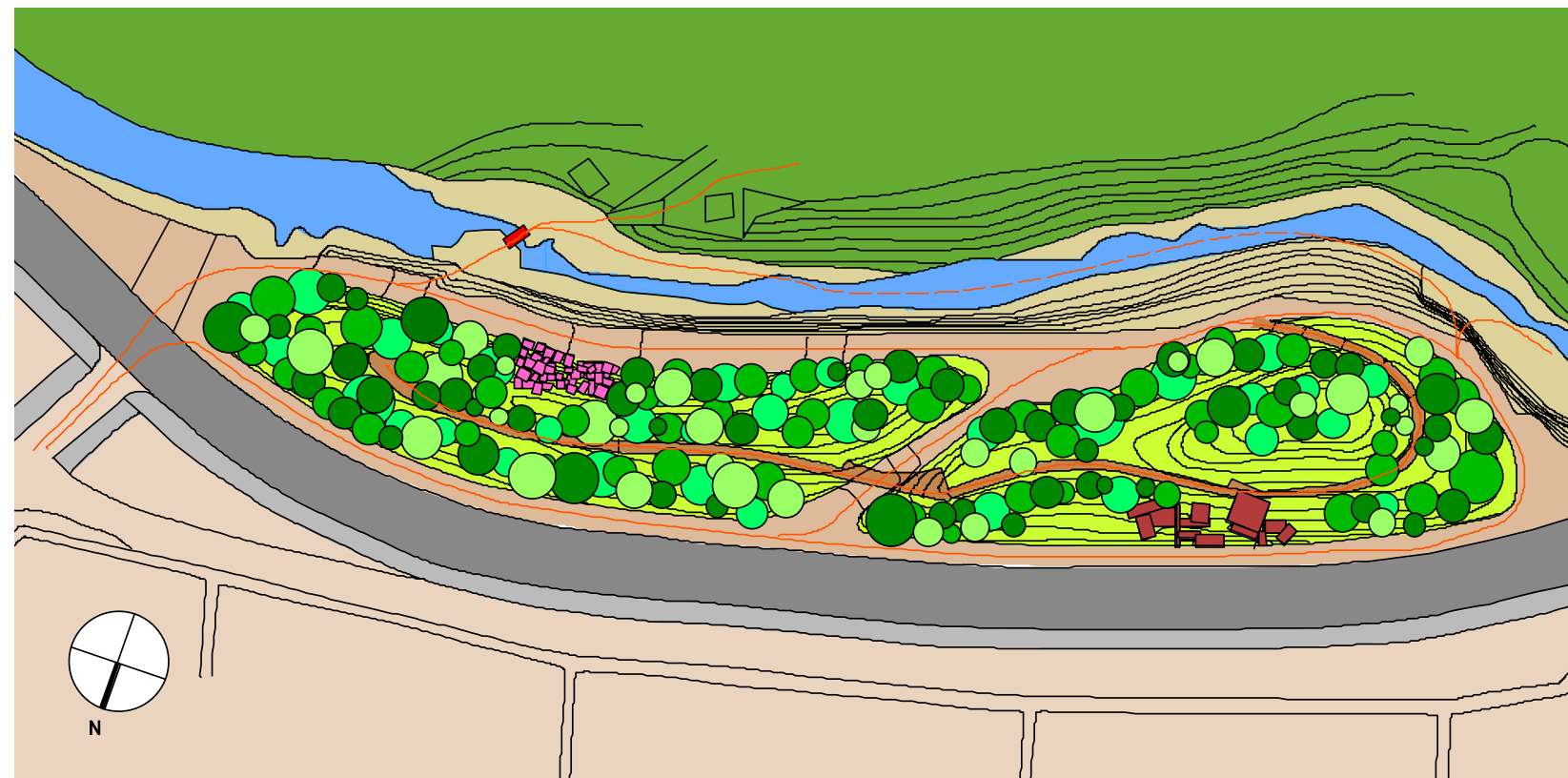


## C 計画内容

本計画の内容は下に示す項目で表す。

- 1 動線（歩行空間）の設置
- 2 道以外の構築物の設置
- 3 水際空間の整備
- 4 その他

計画道路施工後の計画地の歩行空間には、大分川左岸の小道、小山の北側につくられる計画道路に沿った歩道、また大分川右岸に一部広がっている金毘羅山散策路入り口の、3つの歩行空間がある。本計画では歩行空間をできるだけ自然の雰囲気損なわずに、日常的に足を運んでも楽しめるより変化に富んだものにするを提案する。それにあたって新たな小道を設定するに加え、散策空間をより豊かにするような休憩空間の設置も行う。また水位調査によると、大分川左岸側の散策道が現状のままでは大雨の際に浸水する事が確認されるため、水際の整備も必要である。



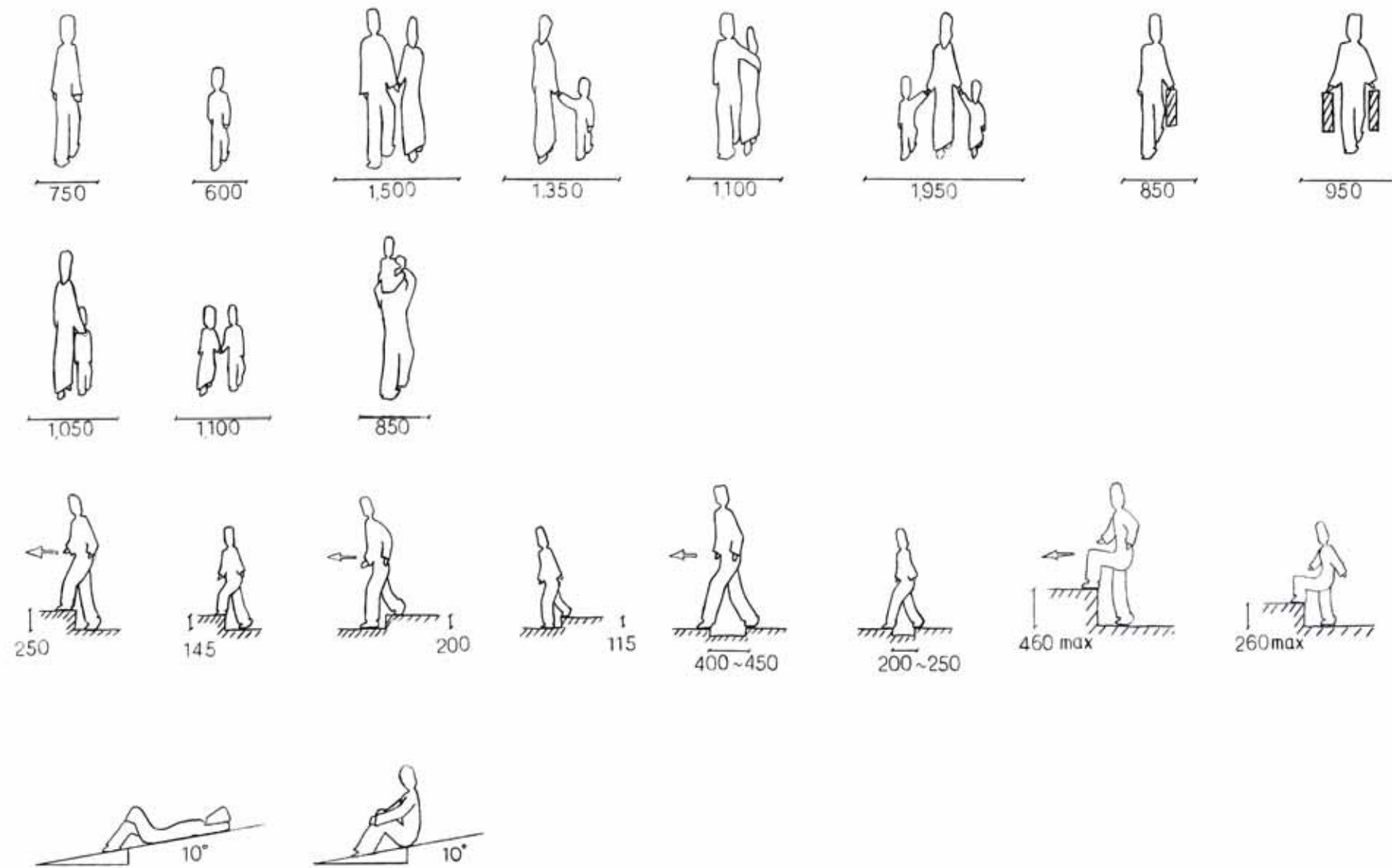
- 主要道線
- - - - - 水中を歩くことができる動線

計画平面図 1:800

## 1 動線（歩行空間）の設置

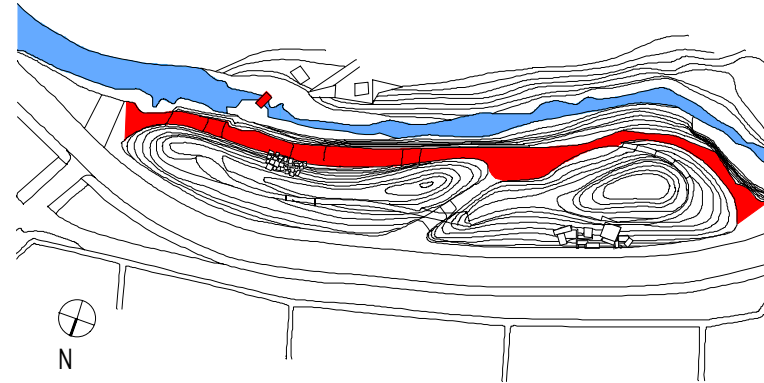
計画地には左岸の小道、小山の北側につくられる計画道路に沿った歩道、また右岸に広がりがある散策路入り口の、3つの歩行空間がある。  
これらの歩行空間に変化を持たせるにあたり、身体的寸法（スケール）が重要であると思われることから、基本的動作のスケールを確認する。

### ■スケール調査



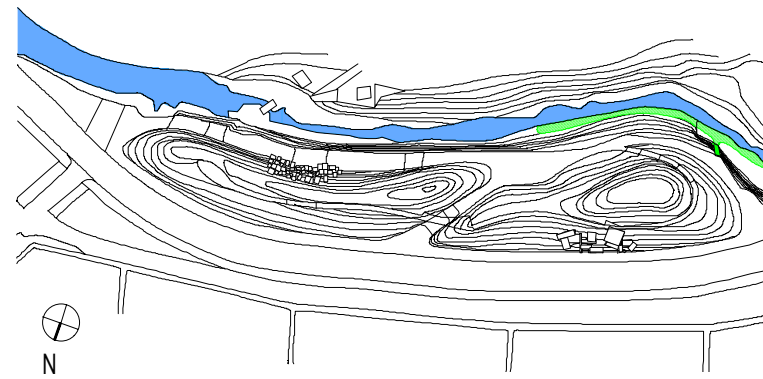
### 1 - 1 大分川左岸

大分川左岸の小道は、親水空間としての計画地の側面から、もっとも重要な歩行空間である。現況の雰囲気を残すためにも、基本的に現状の小道を歩きやすく整備するに留める。ただし後述する他の歩行空間との接続で、その幅員やレベルに若干の手を加えることとする。



### 1 - 2 水際へのアプローチ

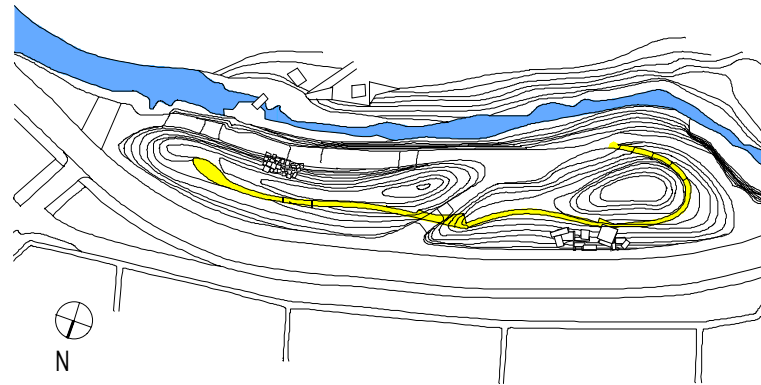
計画地の中で足を水に浸したり、手を洗ったりと気軽に水と親しめる空間を設定する上で、上記左岸の小道より、川へのアプローチを計画地上流に設定している。上流は水量が少なくまた、川の中流あたりから川の中を歩けるといった特徴を持つことより、親水空間として最適な環境といえる。アプローチ自体は、小さな階段若しくは、自然の土手を利用していくものとする。



石や埋め込まれた瓦を足がかりに川へ降りて行く。

### 1 - 3 稜線の小道

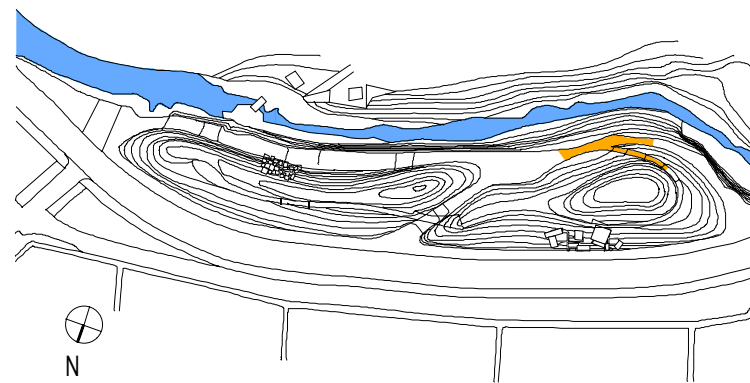
主要な歩行空間というよりも、計画地に回遊性と変化に富んだシーケンスを与える意味で設置する小道である。したがって幅員は狭く、木々の間を縫って歩くサブ的な歩行空間である。ただし前述の大分川左岸は親水性の高い道であるのに対し、ここは小山の起伏を楽しみながら木々の緑の中を歩く空間という特徴を持つ。しかもその高さ故に、樹木の間から自然豊かな大分川と北側の開けた田畑の両方を臨むことのできる歩行空間でもある。この道は最終的には行き止まりとなる面でも、左岸の道や計画道路の歩道とは異なる性格を持つ。しかしこの行き止まりは、他の構造物を通して下に降りていくことができるので、歩行者に引き返すことを強要するというよりも、他のルートを探す楽しみを与えてくれるものである。



稜線の小道最東端行き止まり付近

### 1 - 4 分かれ道

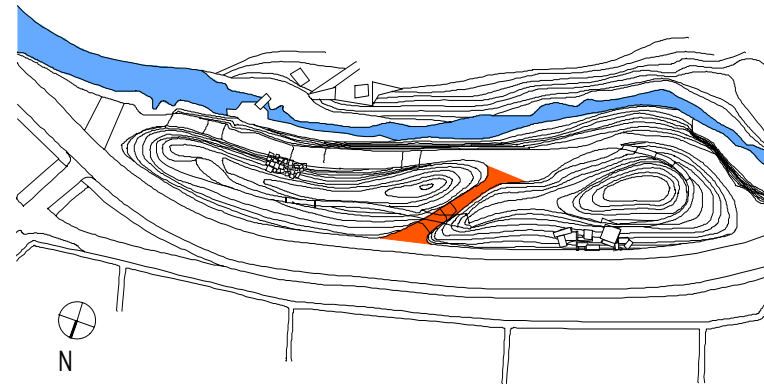
前述した2つの歩行空間が出会う場所である。左岸の道から逸れて小山の斜面を登っていく稜線の小道を目にする時、歩行者はその時の状況に応じて歩行空間の選択をすることができる。その分かれ目は子供がよじ登ったり、子供と大人が同じ視線で歩けるようなH=500~600程度の高低差から始まり、次第にその差が大きくなるにつれて水平距離も離れて行き、登っていく道の幅も狭くなっていくよう設定してある。



段上が自然と小山に登る道に変わる。

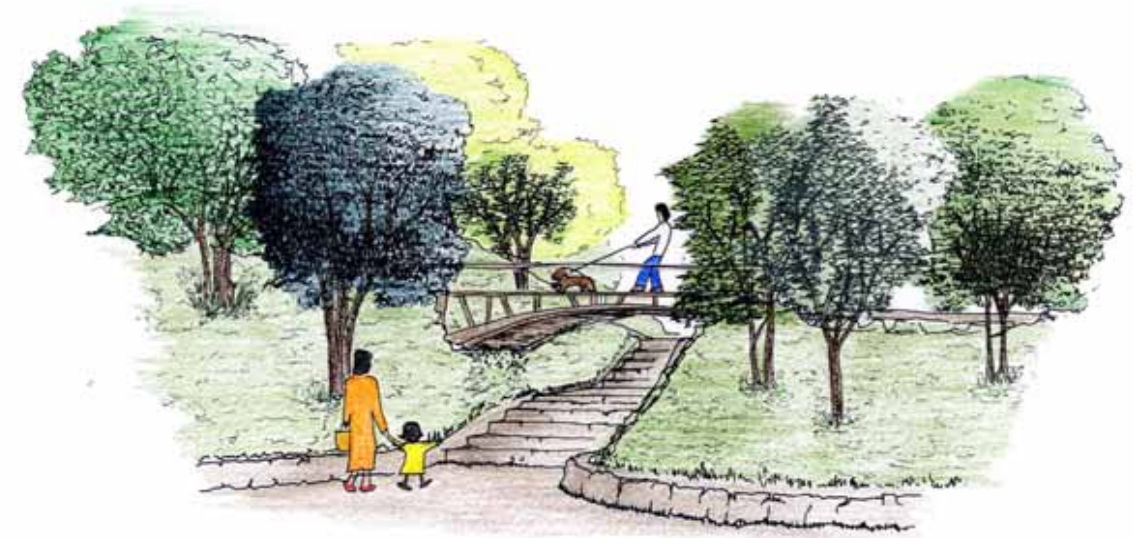
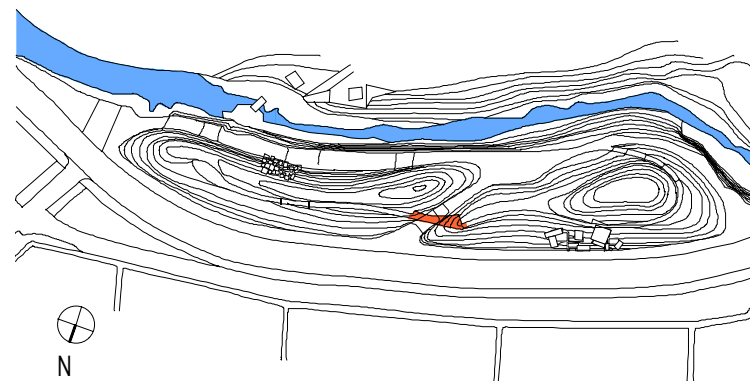
### 1 - 5 狭間の小道

これらに加えて、小山の南北の歩行空間を結ぶ小道をつくることを提案する。この道を作ることによって計画地の表と裏を結ぶことができ、計画地の回遊性に道程の選択性を導入することが出来る。しかし、表裏のどちらからも視線が通ると川辺空間の奥まった雰囲気失われてしまうため、この道は中央付近を歩道よりも少なくとも 2m 以上高くし、登って行くに従って徐々に向こう側の風景が見えてくるようにするのが望ましい。「この向こうに何があるのか見に行ってみよう」と歩行者に思わせる演出である。



### 1 - 6 橋 1

稜線の小道中央に架かる橋は陰陽の性質を持つ 2 つの小山を繋ぎ、また狭間の小道と立体的に交差する場所でもある。これによって狭間の小道にくぐり抜けるといふ行為が加わり、計画道路からのアクセスに川側への期待感を増幅させる。逆に川側からは外界に出て行くゲートのイメージも持つ。また稜線の小道に視界の開けた部分を与えると同時に、下を歩く人のすぐ真上を通り越すという非日常的な体験をつくる。



狭間の小道と稜線の小道が立体的に交差する。

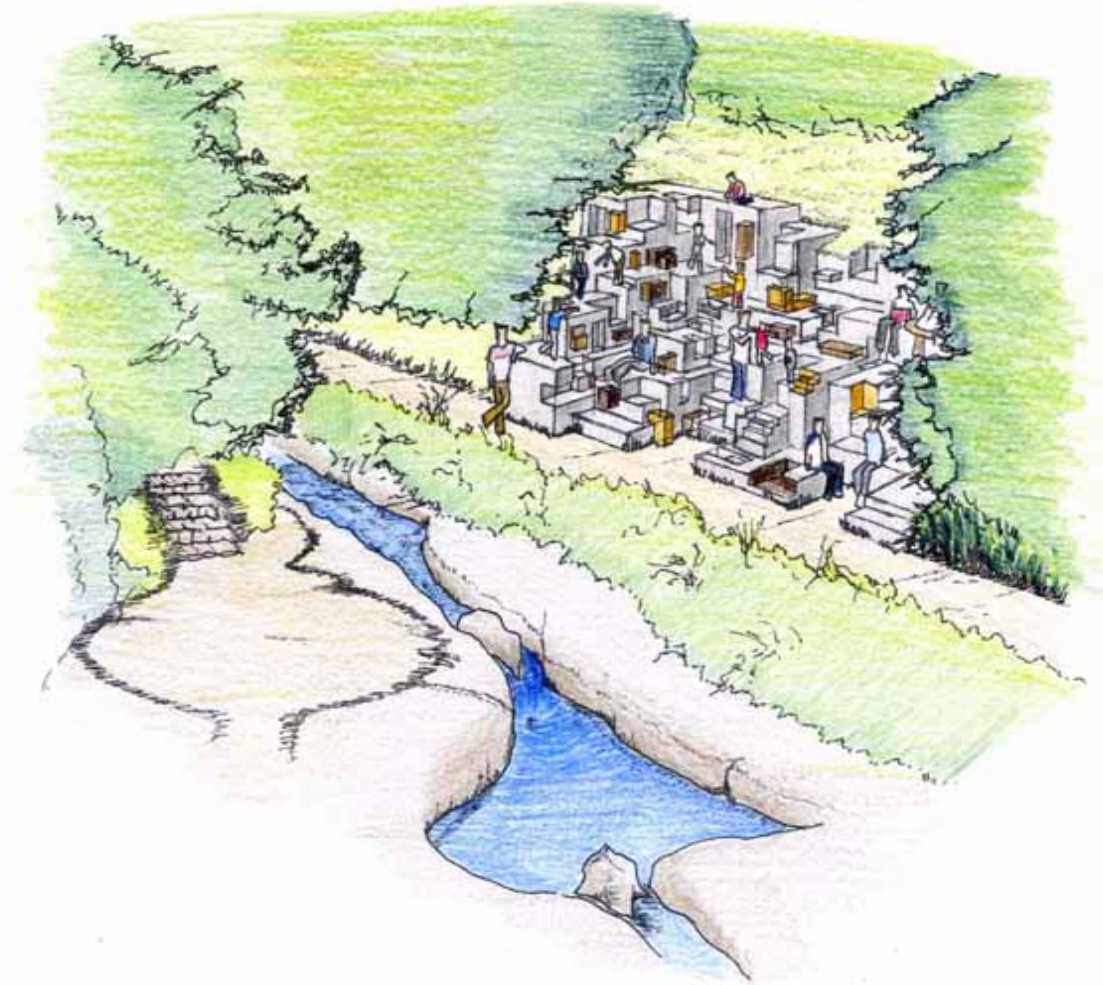
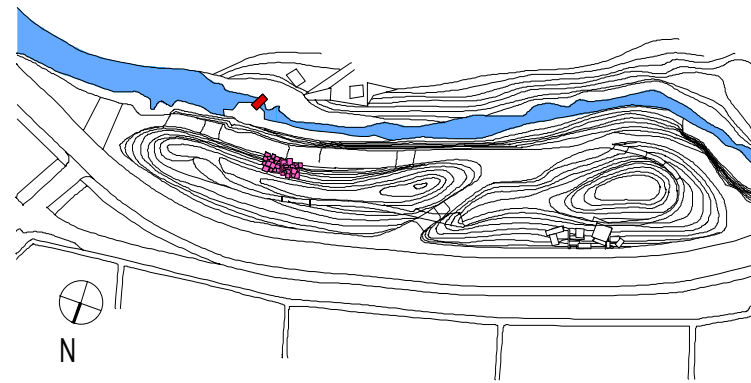
## 2 道以外の構築物の設置

ここでは1で述べた道という動く空間に加え、とどまるための静の空間の設置を提案する。2つの小山に陰陽の概念を重ね合わせたことから、それぞれに性格の異なる空間を作を試みた。東側の小山には親水空間をより豊かなものにするための施設、また西側の小山には農作業者が休憩でき住宅地建設時には住民が親しめる施設の設置を行う。ここでベンチを設置するという手法を取らないのは、単に座って休憩するという行為にとどまらず、この計画全体をより豊かな空間にするために先に述べた歩行空間との関係性を積極的に構築するためである。

### 2 - 1 小山南東に位置する川を見下ろす階段状の構築物

川を望む形で階段を形成する。全体的にランダムな凹凸だが、斜面の傾斜に対応している。斜面を削るにあたり、岩が露出してくると思われるが、この岩を出来るだけそのまま利用し、自然石を用いて階段として形を整えていく。場合によっては岩がそのままの形で存在する部分もある。

川空間を見下しながら休憩できる場であり、また稜線の小道の行き止まり付近から大分川側に降りてくる動線でもあることから、回遊性をより特徴付けるものである。汐い取りの際には観覧席としても使うことができる。



右岸より階段状のオブジェを望む